

劇場と教室と。

木ノ下裕一

先生の授業は人気があった。大教室が狭いくらい学生が集まり、驚くことに半期を通してほとんど受講者が減らない。京都造形芸術大学の学生だった頃、私は、先生の授業を毎週楽しみにしていた。たとえば一般教養の「身体論」。メルロ＝ポンティを出発点としてフォーサイスのダンスをについて語り、そこから井上八千代の京舞の重心について。桂米朝の芸話を引用しつつ「痛み、について解説していたかと思うと、『東海道四谷怪談』のお岩さまが飲んだ毒薬についてなど……1コマ80分の中で、これらの話題が淀みなく展開される。まさに縦横無尽。しかも講義はかなりの早口で進むため、情報量は他の教授の2倍か3倍はある。先生の思考の旅に必死について行こうとすると、終業のチャイムが鳴る頃には頭から湯気が出るほど、ぐったりしたものだが、不思議と心地いい。知の洪水を浴びる―「滝行、のあとってこんな感じかな、と思ったりした。

1年生の前期ですっかりファンになってしまった私は、所属する学科が違うにもかかわらず、先生のあとをついてまわった。休みの日には歌舞伎や文楽にご一緒することもあった。先生は小型のスケッチブックを膝の上に開きメモを取りながらご覧になる。時々、役者の姿や型も素描される。舞台よりも先生の手元を覗き見ているほうが面白いくらいだ。すぐにスケッチブックの銘柄までそっくり真似て、私もメモを取るようになった。観劇後にお互いのメモを見せ合う。その情報量の違いに愕然とした。伝統演劇の見方と、それを古今の演劇や他ジャンル、現代の様々な事象とつなげて、横断的に深めていく方法は、先生から教わったと思っている。あれからスケッチブックは10冊を超えた。今でも客席でペンを走らせていると、学生だった頃に感覚に戻る。「先生のようにもっと深く見たい、もっと広く考えたい」。

「私にとっては劇場が教室なので」とよくおっしゃっていたが、同時に「教室が劇場」だったので

はないかと、今になって思う。僭越ながら、先生の講義は、一人芝居とか語り芸などと同質の熱を感じさせるものであったし、何より手を抜いていると感じたことなど一度もなかった。常に全力で、学生を「知の滝壺、に突き落とす気迫。

大学などで教える機会が増える実感するのだが、毎回ベストパフォーマンスで!というわけにはなかなかいかない。正直、「今日はしんどいからほどほどに」とか「こんなことをしゃべってもどうせわからんやろう」とか、つい考えてしまう日もある。

先生は、そう思う日はなかったのだろうか、それとも、厳しく律しておられたのだろうか。もしくはそれ以上に、教育への思い入れ、何かを伝えること、学生の知的好奇心を最大限広げてあげることへの「希望、が勝っていたのだろうか。

そのあたりのことを、今度、先生と桂川あたりを散歩しながら、ゆっくり話してみたい。先生はいつまでも、私の先生だ。



きのした ゆういち

1985年和歌山市生まれ。木ノ下歌舞伎主宰。小学校3年生の時、上方落語を聞き衝撃を受けると同時に独学で落語を始め、その後、古典芸能への関心を広げつつ現代の舞台芸術を学ぶ。2006年に古典演目上演の補綴・監修を自らが行う木ノ下歌舞伎を旗揚げ。代表作に『娘道成寺』『黒塚』『東海道四谷怪談-通し上演-』『心中天の網島』『義経千本桜-渡海屋・大物浦-』『糸井版 摂州合邦辻』など。2015年に再演した『三人吉三』にて読売演劇大賞2015年上半期作品賞にノミネート、2016年に上演した『勸進帳』の成果に対して、平成28年度文化庁芸術祭新人賞を受賞。第38回（令和元年度）京都府文化賞奨励賞受賞。